

目次

第17回大会報告

研究発表・シンポジウム

総会報告

大会を終えて 湯川 嘉津美

研究発表・参加記 上田 星・日隈脩一郎・相田まり・
相楽 真樹子・北川公美子

新入会員 / 寄贈図書

機関誌編集委員会・事務局からのお知らせ

第17回大会報告

第17回大会は、2021年12月4日（土）に上智大学の担当により、オンラインで開催されました。大会の詳細は以下の通りです。

研究発表

司会：勝山 吉章（福岡大学）
高田 文子（白梅学園大学）

1. ペスタロッチ・フレーベルハウスとナチズム(その1)
小玉 亮子(お茶の水女子大学)
2. ナチズム期のシュタイナー学校の状況について
有川 優子(神戸教育短期大学)
3. 城戸幡太郎の教育学批判
—児童研究所創設を手がかりとして—
日隈 脩一郎(東京大学大学院)
4. 保育労働者としての男性の参入
—全国男性保育者連絡会の保育運動を中心に—
新庄 洸(関西大学大学院)

シンポジウム

テーマ：幼児教育史研究の成果と課題
—幼児教育史研究の新地平』の検討を踏まえて—

提案者：太田 素子(和光大学名誉教授)
勝山 吉章(福岡大学)
榎 瑞希子(聖徳大学)

指定討論者：オムリ 慶子(関西学院大学)
松島 のり子(お茶の水女子大学)

司 会：湯川 嘉津美(上智大学)

総会報告

2021年12月4日 16:30 開会。

オンライン開催につき、総会資料は zoom オンライン上のチャットからダウンロードする。

議長は次回大会の実行委員長である塩崎理事にお引き受けいただいた。塩崎議長により、総会資料の次第に沿って議事が進められた。審議事項については承認の手続きをとる。承認の意思は、zoom 画面の「反応」ボタンから「挙手」マークを選択して表示する。

報告事項

1. 投稿要領の改定について

◇浅井事務局長より、資料に基づいて説明がなされた。第16回大会年度第2回理事会で投稿要領の改定を承認した。大きく3点の変更がある。

- (1) 論文投稿はメールで行う。送付先は投稿用アドレスとなる。
- (2) 投稿論文の PDF には投稿者氏名を入れず題目のみを記入する。投稿様式が変化するため注意してほしい。投稿時は論文本体、査読中の連絡先と題目、チェックリストの3点をお送りいただく。
- (3) 編集著作権は学会にあり、論文等の著作権は著作者が有する。この点は今までと変わらないが、投稿要領にも明記した方がよいということで記載を加えた。

2. 第16回大会年度(2020.10.1~2021.9.30) 会務報告

◇浅井事務局長より、会員数・第16回大会の開催について報告された。

- (1) 会員数：2021年11月末現在、172名。
- (2) 第16回大会：2020年12月12日、山梨大学(オンライン)にて開催された。大会参加者は約70名。

3. 編集委員会報告

◇浅井事務局長より、機関誌第16号の刊行について報告された。

- ・『幼児教育史研究』第16号、2021年11月10日付発行。
- ・編集委員長 一見理事(投稿論文担当)、編集副委員長 高田理事(書評担当)。
- ・投稿論文は4本で、うち1本を「研究ノート」として掲載。その他シンポジウム記録、書評4本を掲載した。

4. 会報の発行について

◇浅井事務局長より、会報の発行について報告された。会報第31号は2月20日に、第32号は6月20日に発行した。その後ウェブ公開版を学会ホームページにアップしている。

5. 15周年記念事業について

◇浅井事務局長より、15周年記念事業について報告された。

本日の大会シンポジウムでも取り上げたが、2021年7月21日付で上巻『幼児教育史研究の新地平—近世・近代の子育てと幼児教育—』が刊行された。会費を納入済みの会員に送付している。下巻は来年刊行予定。

6. その他 特になし

審議事項

1. 第16回大会年度(2020.10.1~2021.9.30) 決算

◇福元理事(会計担当)より、「第16回大会年度幼児教育史学会収支報告」(略)に基づき報告がなされ、承認された。

2. 第17回大会年度(2021.10.1~2022.9.30) 事業計画

◇浅井事務局長より、第17回大会年度事業計画について説明された。

- (1) 『幼児教育史研究』第17号の編集
 - ・機関誌第17号の編集委員長、副編集委員長を選出する。申し合わせでは正副編集委員長は1年交替で、正委員長は翌年副委員長として残り、業務の円滑な引継ぎを図ることになっている。第17号については、正委員長として勝山理事を、副委員長として第16号編集委員長であった一見理事を推薦する。
- (2) J-STAGE 上での公開について
 - ・機関誌第16号は3月頃に公開予定。
- (3) 会報の発行
 - ・従来通り2月頃(第33号：第17回大会報告)、6月頃(第34号：第18回大会案内)を予定している。会員研究情報などの充実を努める。
- (4) 15周年記念事業について
 - ・上下巻で100万の予算を組み、出版社には上巻を50万円で受けて頂いた。下巻については会員数の増加と頁数の関係で50万を少し超過する可能性がある。
 - ・下巻は大会年度中に刊行予定。
- (5) 第18回大会の予定
 - ・会場：東洋英和女学院大学(東京) 実行委員長：塩崎美穂理事。
 - ・日程：2022年12月10日(土)を予定している。

3. 第17回大会年度(2021.10.1~2022.9.30) 予算案

◇福元理事より、資料3(略)に基づき、第17回大会年度予算案が説明され承認された。

4. その他 特になし

大会を終えて

第17回大会実行委員長 湯川嘉津美(上智大学)

幼児教育史学会第17回大会は、2021年12月4日に上智大学で開催の予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の広がりの中で、昨年につき、オンラインでの開催となりました。プログラム送りのぎりぎりまで通常開催を模索しましたが、9月の東京は緊急事態宣言下であり、急遽、オンラインでの開催に切り替えました。対面での開催を楽しみにして下さっていた会員の皆様には申し訳ない気持ちで一杯です。それでも研究発表に45名、シンポジウムに48名、総会に36名の会員の方々

にお集まりいただき、活発な議論が展開されたことに、大変感謝いたしております。

研究発表は4件あり、前半の2件はいずれもナチズム期のドイツを対象にペスタロッチ・フレーベルハウスとシュタイナー学校の状況についての研究発表、後半の2件は戦前・戦後の日本を対象に城戸幡太郎の教育学批判と保育労働者としての男性保育者の参入をめぐる研究発表でした。今回は全体討論の時間を多く取ったこともあり、一つ一つのご発表に対して活発な質疑や討論がなされたのは、大きな収穫だったと思います。

シンポジウムは「幼児教育史研究の成果と課題—『幼児教育史研究の新地平』の検討を踏まえて—」と題し、7月に本学会が刊行した『幼児教育史研究の新地平—近世・近代の子育てと幼児教育—』(上巻)の編集・執筆を担当した太田素子・勝山吉章・榊瑞希子の3名の会員に、本書の検討を踏まえて幼児教育研究史の成果と課題についてご提案をいただき、ついで、オムリ慶子会員、松島のり子会員からのコメントをもとに討議を行いました。太田会員からは、全体の編集方針とともに、第1部について、「ミクロヒストリーの必要性」が語られ、「世界」の子育て史研究への展望が示されました。また、勝山会員からは、第2部について、19世紀から20世紀初頭の時代状況との関わりで各国の幼児教育を押さえた上で、①公教育制度の第一階梯に幼稚園を組み込むことは、国家権力による幼稚園への介入を招くことになるが、それは自由を基調とする幼稚園理念と矛盾しないのか、②幼稚園が公的になることは、(その典型がナチスドイツだが)帝国主義的心性が期待されるのではないか、③そもそも「フレーベル主義」とは何か、といった課題の提示がなされ、さらに、榊会員からは、第3部について、20世紀前半40年間の保育をめぐる時代状況と保育の新潮流(ケアと教育の一体化)が語られ、共時的な保育史の意義が示されました。討論の時間が足りず、物足りない思いをされた方も多かったと思いますが、普段は対象とする国や地域、時代を決めて

幼児教育史研究を進めている者にとって、自分の研究を世界の幼児教育史研究との関連で捉え直し、新たな視点を獲得するよい機会となったのではないのでしょうか。また、多くの課題が示されたことも、今後の研究を進める上で大きな力となるでしょう。

大会翌日の「愉フォロ会」は、塩崎美穂会員の企画により、加藤繁美著『保育・幼児教育の戦後改革』の読書会が著者を交えて行われ、盛会のうちに終わりました。

今回はオンライン開催のため、研究交流の貴重な機会である懇親会を開くことができませんでした。第18回大会は東洋英和女子大学で開催の予定ですが、次回こそは通常開催ができることを願って已みません。

研究発表・参加記

北欧幼児教育史という新たな地平

上田星(関西学院大学・院)

関西学院大学大学院教育学研究科博士前期課程在籍時に、第14回大会「愉フォロ」の発表で各国の幼児教育史の観点から会員の皆様に貴重なご指摘を頂いたことが、幼児教育史研究の面白さを感じるきっかけとなりました。

社会のあらゆる分野において「多様性の尊重」が主張されている中で、私は「多様な性の保育者による保育の質向上のための保育実践」について関心があり、博士前期課程では欧州諸国の中でも、多様な性の保育者の必要性に関する議論を先導してきた「デンマーク」を対象に研究を進めてきました。しかし、デンマークの幼児教育に関する国内の文献は乏しく、幼児教育史に関してはほとんど白紙の状態であり、修士論文を執筆しながらも、本質に十分迫りきれていないという違和感を抱いていました。そこで博士後期課程進学後、デンマークの保育者養成校に交換留学で約半年間在籍し、その後はデンマークの保育施設でのインターンシップを経験しました。デンマークの保育者を対象に調査を進めていく中で、「デンマークの保育者の専門性」の歴史的な形成過程を辿ることが大きな研究課題として残されていることに直面しました。以降、デンマークの保育者養成史に焦点を当て、現地の教育歴史協会や図書館で収集した史料と向き合いながら、日々研究を続けています。

今回参加させて頂いた第17回大会のシンポジウムの最後には、松島先生や湯川先生から、「マクロな視野で幼児教育史研究を見た時に、空白が依然として多く、これからの世代を担う研究者に引き継いでもらいたい」というお話があり、自身の研究が空白を埋めるための一つのピースになればという思いが一層強まりました。また、北欧諸国の幼児教育はNordic approachという表現があるように、各国が相互に影響を与えなが

ら発展してきた歴史があります。まだまだ未熟者ではありますが、本学会を通して「北欧幼児教育史」という新たな地平を築くための一助となる研究をしていきたいという想いを抱いておりますので、今後、学会員の皆様と交流の機会が増えていくことを願っております。

城戸幡太郎、あるいは幼児教育史研究との邂逅 日隈脩一郎(東京大学・院)

2020年度に入会しました、日隈脩一郎と申します。今回の2021年度(第17回)大会では「城戸幡太郎の教育学批判——児童研究所創設を手がかりとして」と題して発表いたしました。恐縮ながら、本学会大会については参加・発表ともに初めてであり、幼児教育史研究のお歴々を前にして緊張も一入でしたが、今後の研究を遂行する上で大変有意義な時間を過ごすことができました。稲井智義先生からは先行研究への、高田文子先生からは他の児童研参加者のテキストへの目配せをするようご助言いただき、浅野俊和先生からは設立趣意書など児童研の名で出された文書も十分に渉猟するようご指摘をたまわりました。また、発表でもその研究成果を参照させていただいた宍戸健夫先生からは、教育学研究の戦前／戦後というより長い時間軸を設定した上で研究方針を立てることの意義をご教示いただきました。お聴きくださったみなさま、ご批判をたまわりました先生方には、この場を借りてあらためて感謝申し上げます。

私はもともと、文学部で西洋哲学を修め(かじり?)、卒業論文で扱ったフランスの哲学者アンリ・ベルクソンの哲学を、体系的な教育思想として把握することを長期的な目的とするようになりました。その背景には、学部生時代に教育学部で受講した講義のいくつか、さらには教育実習の影響がありました。さしあたって、ベルクソンの著作が教育実践家・教育理論家たちにどのように読まれたのかということを追えながら自らの議論のいわば歴史的な基礎づけを目指し、修士論文では、大正新教育を牽引した人物の一人である及川平治を取り上げ、その議論における彼のベルクソン解釈を剔抉せんとしました。ベルクソン哲学の教育思想としての読み直しという従来の目的に沿えば、博士課程での研究はそのための読解を肅然とこなせばよかつたところ、修論執筆過程で、和光大学の及川文庫が所蔵する文献の、及川自身のものとみられる書き込みを検討するという地に足の着いた(と、テキスト読みに終始してきた自分にとっては思われた)文献調査を行ったことが目の覚めるような経験となり、生の史料に触れた研究に携わりたいと思うようになりました。しかし、教育学どころか、歴史学の基礎的なコースワークさえ受けてこなかった身にとり、そこからは受難の旅で、博士課程に進学した2020年はコロナ禍とも重なって自らの研究、その手前の知的資源・環境のありようを見つめ直す

年になりました。そもそも教育学とは何か、教育を研究するとはいかなる営みか。そのようなことを、具体的な素材なしに考えるわけにもいかず、まずは日本で最初に教育学なるものに触れ、教育の研究それ自体について考えていた先人たちの思考に触れようと思いました。そこで出会ったうちの一人が、城戸幡太郎その人だったので。出会いの経緯(のいくらか)は、今回の発表の通りです。

約言すれば以上のような遍歴を辿ってきた者にとり、幼児教育史研究が何かなど、その片鱗さえつかめているわけではありませんが、城戸及びその周辺の「教育学とは何か」を問おうとした実践家・理論家たちについて調べ上げる上で、幼児教育史学会に入って研究状況をフォローし、発表等を通じて学ぶことは不可欠であるように思われました。みなさまの胸をお借りしつつ、今後はよりのめを絞った研究活動に従事できればと思います。あらためまして、どうぞよろしく願いいたします。

新入会員としてのごあいさつ

相田まり(山梨学院短期大学)

はじめまして、今年度入会致しました相田まりと申します。新入会員としてのご挨拶と自己紹介を兼ねた参加記ということで、この場をお借りして少しだけ、私自身のことをお話しさせて頂きたいと思っております。

私は大学卒業後一般企業に就職し、数年の社会人経験を経て大学院に入学しました。大学院ではじめて教育学に触れ、基礎的なことを一つ一つ学んでいくうち、教育学の中でも特に大正新教育の思想と実践に興味を持ちました。昨年度まで在籍していた東京大学大学院では、自由学園の創立者である羽仁もと子の思想について研究しておりました。

羽仁もと子に着目したきっかけは、彼女が「真の自由人」の教育を掲げつつキリスト教思想を基盤としていることに対して、「自由な人間を育てるために、なぜ宗教が必要なのか(自由な人間を育てることと宗教を教えることは矛盾するのではないか)」という疑問を抱いたことでした。哲学的素養も宗教に関する知識もほとんどない状態で、素朴に感じた疑問でした。研究を始めてみて、この問いがとても深く大きな問題であることを知り、驚きとともに研究の楽しさを知りました。

修士・博士課程を通して上記の問いに取り組んでまいりましたが、最近になって、彼女の娘である羽仁説子についても、きちんと研究しなければならぬ(研究してみたい)と思うようになりました。戦前・戦後を通して幼児教育に携わり、日本子どもを守る会の創設にもかかわった羽仁説子は、彼女の活動だけを見ても、また母・もと子との関係においてみても、非常に興味深い人物です。いまはまだ着想段階ですが、今後研究を進めていきたいと思っております。

大会では、これまで著作や論文などで勉強させて頂いていた先生方に(オンライン上ではありますが)直接お目にかかることができ、胸が熱くなりました。そして、そうした先生方が真摯にご自身の研究テーマと向き合い、悩みながらご研究を進められていること、また、参加者同士の議論から新しい知を生み出そうと試行錯誤されている姿を拝見し、とても刺激を受けました。一つ一つのご発表内容がとても深く、リアルタイムでは理解が追いつかないところも多々ありましたが、じっくり振り返りつつ、次回に向けて勉強していきたいと思います。

幼児教育史に関しては足を踏み入れたばかりの身ですが、これからどうぞよろしくお願い致します。

新入会員としてのごあいさつ

相樂 真樹子(上智大学・院)

今年度入会いたしました相樂真樹子(さがらまきこ)と申します。上智大学大学院博士後期課程に在籍しております。私は、幼い頃から憧れていた幼稚園教諭になるために保育系短期大学に入学、卒業後は自然豊かな環境の中で自由保育ができる私立幼稚園に勤務していました。その頃に出会ったある親子との関わりがきっかけで、特別な配慮が必要な子どもの支援や障がい児保育の在り方についてしっかり学ぼうと決心し、勤務していた幼稚園を退職して4年制大学に3年次編入しました。大学卒業後は、保育現場に身を置きながら社会人枠で大学院(修士課程)に進学し、特別な配慮が必要な子どもの親の障害受容について研究を進めました。大学院修了後の2年間は、今後は何を主軸に生きていこうかと自分と向き合いながら悩み考えた時期でした。大学院在学中は、大学院修士・博士課程までストレートで進んでいる人たちが身近にいた関係で、このような方々が研究者になっていくのであり、一保育者に過ぎない自分が果たして研究者になれるのだろうかと思っていました。色々突き詰めて考えていくうちに、「自分は保育が好きだから、保育に関わる道をひたすら前に進んでいこう」と決めてからは、どのような形であれ、周りに左右されずに自分自身が納得して起こした行動に間違いはないと信じられるようになりました。そんな中、縁あって、保育士養成を行う専門学校に勤めることになり、その後は短期大学教員となり、今に至ります。

今回、会員として初参加となりました第17回大会の感想を述べさせていただくと、まず、新型コロナウイルス感染症の流行のため前年度に引き続きオンライン(Zoom)で開催ということで、どのような状況になるのかと思っていましたが、実際は、オンライン参加に慣れていないのは私だけであり、4人の会員の方々の研究発表に対する質疑応答の場面では、発表に対して、多くの先生方が様々な視点でコメントされ、議論がなされる

ことに驚きました。引き続き午後の部のシンポジウムでは、『幼児教育史研究の新地平(上巻)』の編集・刊行を終えてということで、著者の先生方による歴史研究の解説に、ただただ頷くばかりでした。更に、大会関連企画として翌日開催された「海外の幼児教育の研究動向を愉しみながらフォローする会」では、加藤繁美先生の著書『保育・幼児教育の戦後改革』の読書会と称して著者の加藤先生を交えた戦後の保育史について考える時間に参加しました。著名な先生方が繰り広げる議論や質疑応答など、内容の濃さに更なる驚きを経験したと同時にこれほど厚みのある学会の企画に出会ったことがなかったので本当に参加して良かったと思いました。研究は本来自由なのだと、再確認も出来ました。

私は現在、近代日本における幼稚園・託児所の親支援をテーマに研究を進めています。明治維新以降、近代化を目指す日本政府が取り組んできた家庭教育や、幼稚園・託児所が子育て家庭に果たした役割にも着目しています。100年以上前から戦前期までを扱うテーマになるため、今は専ら先行研究を調べて整理するという地味な作業を繰り返しています。幼児教育史研究を切り拓き発展に寄与し続ける諸先生方の研究成果を辿りながら新たな知見を加えたいと願っております。

新入会員としてのごあいさつ

北川公美子(東海大学)

この度入会させていただきました北川公美子(きたがわくみこ)と申します。保育系の大学を出た後、大学院では児童文学を専攻し、特にアンデルセン童話を対象として、明治期から現在までの、日本における受容の実態を明らかにすることに取り組みました。そこで、児童文学とともに幼児教育の歴史を重ね合わせて見ることで、これまで自分が捉えていた研究分野の景色が大きく変わり、その面白さに引き込まれ、現在に至っています。

これまでの研究活動では、明治期以降の、各時代の幼稚園教育における童話の教育的意義やその選択基準等の変遷を明らかにしてきましたが、当時の社会的な動きを背景にしたさまざまな論争や、その揺れ動いていく様子は、現在の教育を取り巻く状況と重なる部分が多くあると感じています。一方で、各地域の実際の幼稚園の保育日誌等からは、当時の保育者や子どもたちの中に教材としての童話が息づいていることも感じられました。このような研究の流れから、現在は、童話の話し方についても興味を持っています。小学校教育では「読む童話」ですが、幼稚園教育では保育者が童話を話し、幼児にとっては「聞く童話」としての出会います。そのため、明治期から、教育方法としての「話し方」が研究されていて、そこには、児童文学を日本に普及させた口演童話が深くかかわっていたことがわかりました。そのような児童文学の視点からのアプローチを含

めながら、各地域に発足した童話にかかわる組織団体の動きを追っているところです。

このような私が、初めて、しかもリモートで研究大会に参加させていただき、正直、ドキドキの連続でした。その理由の一つは、リモートでの研究大会に参加することがなかった私が、どのように進められるのかわからず、授業で先生に指名される学生の気分で、不安な気持ちを抱えていたことです。しかし、実際には、一つ一つの発表を、マンツーマンでじっくり聞いているようで、「深く学べた」と感じました。もう一つの理由は、聞かせていただいた発表の多くが、これまで自分がほとんど触れてこなかったような内容で、ただただ面白く、これまでの自分の研究がまだまだ狭いものであることを実感し、それを「こじ開けられた」ような新鮮な刺激を受けたためです。城戸幡太郎の教育や、保育労働者としての男性という捉え方など、日本の幼児教育にかかわることではありますが、私自身が未着手の

内容であり、自分の研究フィールドと繋ぎ合わせて考えることで、視野が広がったような気がしました。また、研究対象が日本の幼稚園教育が中心で、海外の教育史についてはほとんど把握していない私にとって、ドイツのナチズム期の教育の状況はとても興味深く、多くの刺激を受けました。そして、明治・大正からの教育の流れを受けた昭和期の日本が、どのように戦争への意識が削り出されていったのか、それが戦中・戦後のどのような流れへとつながっていくのかということを知りたいと考えている私に、多くの示唆をいただきました。

コロナ禍で、研究大会を開催することは、その準備から実施まで、大変なご苦勞があったと思います。それでも、このような、同じ歴史という視点を共有する仲間との発表・意見交換の場に参加させていただいたことは、自分自身の研究に大きな刺激と励みになりました。

どうぞ今後ともよろしくお願ひいたします。

新入会員・会員異動（2021.6.30～2022.3.4）

省略



寄贈図書（2021.7～2022.2）

国立教育政策研究所（編集）『幼児教育・保育の国際比較:OECD 国際幼児教育・保育従事者調査 2018 報告書[第2巻]——働く魅力と専門性の向上に向けて』2021年10月。

北本正章『子ども観と教育の歴史図像学—新しい子ども学の基礎理論のために—』新曜社、2021年11月。

是澤博昭『六義園・柳沢家の雛祭—『宴遊日記』にみる江戸の人形文化—』ミネルヴァ書房、2022年1月。

機関誌編集委員会からのお知らせ

『幼児教育史研究』第17号への投稿論文(研究論文・研究ノート)を募集いたします。論文は、2022年5月1日から5月31日までに事務局宛にメールでお送りください。詳細については学会ホームページ掲載の投稿要領をご確認ください。多くの皆さまからのご投稿をお待ちしております。

事務局からのお知らせ

1)会費納入のお願い

振込用紙を第17回大会年度(2021年10月1日～2022年9月30日)とそれ以前の年度の会費が未納の方にお送りしております(2022年2月確認)。宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうえご納入ください。(シール

の記載と振り込み用紙がない会員は完納状態にあります。) 本状と行き違いでご納入の場合には、何卒ご容赦ください。

年会費： 一般会員 7,000 円 特例会員(学生・退職者等) 4,000 円

送金先： 郵便振替 00190-9-73668 加入者名： 幼児教育史学会

2) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は、どうぞもれなくメールにて下記の学会事務局までお知らせください。

幼児教育史学会会報 第33号 2022年 3月 10日
発行者 幼児教育史学会

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院教育学研究科 浅井幸子研究室気付
幼児教育史学会事務局 E-mail: admin@youjikyokushi.org 郵便振替 00190-9-73668

編集 塩崎美穂 印刷 木元省美堂